

大野正夫：中華藻類学会 Chinese Phycological Society の紹介

筆者は、今年度の中華藻類学会の年會に、東京水産大学の能登谷正浩教授とともに招かれて講演を行ったが(図1)、会長のHong-Nong Chou教授から、中華藻類学会に関する資料をいただいたので、ここに紹介したい。

台湾の中華藻類学会は、海藻の研究者である台湾大学海洋研究所のChiang Young-Meng教授が中心となり、10名ほどの発起人によって1997年2月16日に設立された。ほぼ6年が過ぎたが、この期間、News letterによって会員相互の交流や広報活動を続けている。1999年にChiang Young-Meng教授が海洋研究所を退官した時より、台湾大学漁業科学研究所が学会事務局となり、学会運営を組織するようになった。

Chiang Young-Meng教授が初代会長であり評議会委員長であったが、2年後に、漁業科学研究所のHong-Nong Chou教授が2代会長になった。その2年後に3代会長になった。Chiang Young-Meng教授は、終年名誉会長となり、現在でも学会運営に助言をしている。2002年には会員は200名に達した。多くの学生会員を含むが、活発に学会の活動に参加しているメンバーは120名ほどである。会社会員(団体会員)は6社である。

学会活動一環としては、学生のための藻類に関するワークショップ、高校の先生のための藻類学研修を行っている。また、特別な技術を取得するワークショップを研究者や漁民にため、時折開催している。1999年には、毒性赤潮の同定に関するものワークショップ、2000年には赤潮のモニタリングに関するワークショップを行った。2000年には、東京農工大学の松永教授に、国際会議の途中、台湾に立ち寄ってもらい、21世紀のマリンバイオテクノロジーという講演をしていただいた。毎年、12月に大会とポスターセッション、また藻類会社訪問を行っている。今年度の大会には、シンガポール、香港、日本から藻類研究者を招聘して講演をした。さらに、毎年1回か2回の研究発表会を持っている。現在、ニュースレターを年4回発行しており、ホームページも持っている(



図1 中華藻類学会の会場にて
左端:Chiang Young-Meng会長,中央:Chiang Young-Meng
名誉会長

<http://www.phyco.org.tw>)。評議会の下に、;ホームページ担当(Wei Lung Wang 博士)、ワークショップ:(Su-Ran Hwang 博士)、ニュースレター担当:(Pei-Chung Chen教授)などを組織している。

台湾では、Chiang Young-Meng教授が、海藻分類学の研究を行ったが、彼の研究室の卒業生は、海藻の分類関係の研究者は育たず、微細藻類の研究や化学の分野に移っており、現在、海藻学を活発に研究している者はいないそうである。Chou教授は、米国に留学後、赤潮の毒成分の研究を行い、最近のトピック的研究は、ノリの糸状体からフィコシアニンを抽出し、その色素が、非常に評判が良いという。台湾では、クロレラ、スピリルナ、ドナリエラの培養事業がかなりの生産をあげており、この分野に関係する藻類研究者が多い。

(高知大学海洋生物教育研究センター 大野正夫)